近畿大学中央図書館蔵 奈良絵本絵巻『さざれ石』・『松竹物語』復元試案（上）

高木浩明・大角ひかる・角地夏葉・木下桜典・阪口俊弥・成尾信明・藤本将太・松尾遼

一

本稿では、近畿大学中央図書館に所蔵される二巻の奈良絵本絵巻の紹介を行う。

絵巻を収める塗箱（三七・四×一六・八糎）には、銀色の筆で、上部に「鶴かめ／松たけ」、下部に「二巻」と記されているが、「鶴かめ」とある方は、『鶴亀物語』と同類の御伽草子の『さざれ石』である。現在は『鶴亀物語』と『さざれ石』を別作品として扱うが、他に国立国会図書館にも近大本と同じ組み合わせの「鶴亀松竹物語」と題する二巻の絵巻（請求記号、ん―一七四）が伝来していることからも、製作当初は、『鶴亀物語』と『さざれ石』に明確な区分はなく、「鶴亀物語」として認識されていたのかもしれない。

本絵巻については、図書館のホームページの「近畿大学貴重資料デジタルアーカイブ」に画像が公開されているので、誰でもアクセスして見ることができるが、公開されている画像にたどりつくのが難しい仕組みになっている。

画像を見る場合は、図書館のホームページ上にある「貴重書・コレクション」のバナーをまずはクリックして、「近畿大学貴重資料デジタルアーカイブ」、「#カテゴリ／貴重資料」、「▼和書」という具合に進んで、ようやく該書の画像にたどりつくことができる。

二〇二二年度、私（高木浩明）が担当する「書誌学2」の授業において、この絵巻について徹底的に調べた後に、原本を閲覧するという体験授業を行ったが、授業で学部生とともに本絵巻を読み始めた早々、絵巻の詞書（本文）と絵に錯簡（前後が入れ違って乱れている）があることが判明した。

授業内容は当初の予定を大幅に変更し、学生と共に、この絵巻の本来あるべき姿の復元をめざすこととなった。そのため、学生らと関連する資料の収集をし、さらに同様の絵巻を所蔵する機関や大学のホームページなどで公開されている画像を参考に、復元を試みた。

錯簡が生じる原因は様々あるが、今回のように複数の料紙が貼り合わされて作成される絵巻の場合には、ある時期に行われた修理の際に、誤って順番が前後してしまったということが考えられる。

修理の際、一枚ごとに剥がした料紙には、修理後に再度貼り合わせる際に順番が乱れないように、番号か符丁かを付けておくものだと思うが、現状では本絵巻にその痕跡を確認することはできない。錯簡は起こるべくして起こったとも言えるが、あまりにもお粗末である。さらに本絵巻の錯簡は、同じ絵巻の中だけで起こっているだけではなく、絵については二巻の絵巻間で相互に入れ替わっていることが判明した。これでは、絵巻を広げて順番に物語を読む事はできない。

以下は、「書誌学2」の受講生と共に行った絵巻の復元を、試案として示したものである。一部の絵については判断を保留しているものも含まれているが、それについてはこの復元試案に対する識者のご教示をお願いしたいと考えている。

本稿では、紙幅の都合があり、まずは『さざれ石』についての復元案と本文の翻刻を示すこととする。

二

『さざれ石』は、不老長寿を祝う祝儀物の一種で、同類の作品が多いが、薬師信仰を中心に据えているところに特徴がある。

神武天皇から数えて十三代目の成務天皇は子供に恵まれていたが、末の子は姫宮であった。「さざれ石の宮」と呼ばれた姫宮は、十四歳の時、摂政殿の北の方となった。

姫宮は、詩歌・管絃をはじめ、仏道にも通じていたが、中でも薬師如来を信仰し、東方浄瑠璃世界へと転生することを願っていた。

信心深い姫宮は、朝夕、薬師の名号を唱えていたが、ある日、どこからともなく真鶴が飛来して、「まつ（松）のえた（枝）には、

ひなつるの（雛鶴）、すたつをみれは、うこきなき、いはほのかたにゐるかめの（亀）、千世よろつ代（万代）もかきりなく、いはふはきみかためなれや、こゝろもきよきいけみつの、すめるはひろきめくみかな」という歌を歌った。これを不思議に思った姫宮は、その意味を博士に占わせると、「きみのきみにてわたらせ給ひけれは、おんこく万里のはたう（波濤）までもうこきなく、おさまるへし」（国の隅々までが安寧になるであろう）ということと、「又ひめきみ（姫君）の御いのちは、ちとせかあひた（間）もくちすましき」（姫君が不老長寿となる）という、二つの占いの結果が出た。

ある日の夕暮、姫宮が月を眺めて、浄瑠璃浄土に思いをはせていると、音楽が聞こえ、異香がし、花が降り、一人の童子が雲に乗って忽然と姫宮の前に現れ、自分は薬師如来の十二神将の金比羅大将であると名乗り、姫宮に瑠璃の壺を渡した。この壺の中には薬が入っていて、それを舐めると不老長寿となることを語り、天へと帰って行った。

壺には、「君か代は千世にや千よ（八千代）にさゝれ石のいはほ（巌）となりてこけ（苔）のむすまて」という歌が書いてあった。これこそ、東方浄瑠璃世界の主、薬師如来の詠んだ歌であると悟った姫宮は、その後、名前を「いはほのみや」と改め、年を取らず、つらいこともなく過ごし、薬師如来への信仰を一層深め、仕える人々にも薬師の教えを広めた。

そんなある日、姫宮の前に薬師如来をはじめ、天人らが天下り、華やかな浄瑠璃世界を目の前に見せてくれた。

この話を聞いた父の成務天皇は、姫君に従い、薬師如来を信仰するようになると、一天四海も穏やかに治まった。そこで位を皇子（仲哀天皇）に譲り、益々薬師如来を信仰し、長寿を全うした。

三

【書誌】

さざれ石

［形態］絵巻、一軸。

［分類］御伽草子

［表紙］山吹色入子菱文地唐草散らし表紙。三一・四×二五・八糎。見返し金箔。

［外題］無。

［内題］無。

［尾題］無。

［紙数］二一紙（うち、絵七図）。第一紙（詞1―1）、五〇・一糎、第二紙（詞1―2）、二五・六糎、第三紙

（絵1）、五三・〇糎、第四紙（詞2）、五一・四糎、第五紙（絵2）、五二・一糎、第六紙（詞3―1）、五一・三糎、第七紙（詞3―2）、五一・三糎、第八紙（絵3）、九二・二糎、第九紙（詞4―1）、五〇・六糎、第一〇紙（詞4―2）、二四・七糎、第一一紙（絵4）、九三・〇糎、第一二紙（詞5―1）、五一・六糎、第一三紙（詞5―2）、五二・一糎、第一四紙（詞5―3）、五二・〇糎、第一五紙（詞5―4）、五二・一糎、第一六紙（詞5―5）、五二・一糎、第一七紙（詞5―6）、二五・三糎、第一八紙（絵5）、九三・〇糎、第一九紙（絵6）、五二・二糎、第二〇紙（詞6―1）、五〇・八糎、第二一紙（絵7）、九〇・五糎、合計、一一六七糎。他、後余白一〇・二糎。

［字高］二六・〇糎。

［料紙］斐紙。本文の料紙には、秋草等の金泥下絵あり。

［奥書］無。

［備考］錯簡の他、本文に一部、目移りが原因の誤脱がある。

【翻刻】

凡例

一、原本通りに翻刻し、改行も原本のままとしたが、本文の傍には、本絵巻の明らかな誤脱を〇に入れて記した他、多くは学生が本文を読む際の参考として、適宜漢字を宛て、〇内に記するとともに、句読点を施した。

一、本絵巻には大きな錯簡があるが、現状を知るため、あえて現在の順番通りに翻刻、その都度、本来のあるべき位置を記した。

（第一紙・詞1―1）

それあめつちひらけはしまりしより
このかた、人わう（人皇）の御代となりに
けり。されは、しんむてんわう（神武天皇）より第
十三代にあたらせ（給ふ、脱か）・みかとをは、せいむ（成務）
てんわう（天皇）とそ申たてまつる。このみかと
は、ことにたみ（民）をあはれみ、まつりこと
すなをにして、四かい（四海）のけきらう（逆浪）、
をたやかなれは、こくとの（国土）人みん（人民）、た
のしみ、この君いく千代、よろつ世
とのみあふきたてまつりて、さうもく（草木）
までもなひかすといふ事なし。
そのうへ、わうし（皇子）あまたわたらせ給ひ
けるか、すゑにあたらせ給ひしは、姫宮

にてそおはしましける。かすあまたおはしましける御すゑなれはとて、」（一紙）

（第二紙・詞1―2）

御名をは、
さゝれいしの宮
と申て、
御かたちいつくしう、
心さま、ゆうに（優）
ならふ御方
こそ
なかり
けれ。」（二紙）

（第三紙・絵1）

錯簡。摂政の北の政所となった姫宮のもとに、つがいの真鶴が飛来して、松の枝に巣作りをする場面。本来は、現在の第七紙目の詞書の後に入るべき絵。

ここには、第一九紙の絵（絵6）、もしくは『松竹物語』の第三紙に入っている絵が入るか。

要検討。

（第四紙・詞2）

錯簡。本来ここには、現在の第六紙（詞3―1）と第七紙（詞3―2）が入り、その後に現在の第三紙の絵（絵1）が入る。

ひめきみ（姫君）は御らんして、さてもふしき（不思議）
なる事かなとおほしめし、やかてはか（博）
せ（士）をめし、うらなはせられけるに（占）、はかせ（博士）御
まへにまいり、ときのさうこくさうしや
う、ひのさうしやうをかんかへよと手を
はたとうつて、さてもめてたき事
かな。それつはさのたくひおほしといへ
とも、つる（鶴）は千ねんのよはひをのふる
ときく。されはうたふこゝろは、きみの
きみにてわたらせ給ひけれは、おん
こく万里のはたう（波濤）までもうこきなく、
おさまるへし。又ひめきみ（姫君）の御いのち
は、ちとせかあひた（間）もくちすましき
とのうらかたなりと申けれは、ひめき（姫君）
みなのめにおほしめし、いろ〳〵
の引（引出物）ものをたまはり、はかせ（博士）はや（宿）

とにそかへりける。」（四紙）

（第五紙・絵2）

錯簡。真鶴が飛来して歌を歌ったことを不思議に思った姫君が、その意味を博士に占わせ、博士が占いの結果を姫君に勘申した場面。

（第六紙・詞3―1）

錯簡。現在の第六紙（詞3―1）と第七紙（詞3―2）は、本来は、現在の第四紙目と第五紙目に入るのが正しい。

みかとの御てうあい（寵愛）なのめならす、いつきかしつき給ひける。さるほとに、かのひめきみ（姫君）、御とし十四さいになら
せ給ひけれは、せつしやうとの（摂政殿）、きた（北）のまんところ（政所）にたゝせ給ふ。しいか（詩歌）
くはんけん（管絃）のみちにくらからす。きや（事）
うろんにいたるまて一しとしてとゝ
こをる事ましまさす。あるときひめ（姫）
宮おほしめしけるやうは、それふつ（仏）
たう（道）をねかふに、ほけきやう（法華経）一のまき
はうへんほん（方便品）にとかれしは、十はうふつ（十方仏）
と中ととかれしうへは、ほとけ（仏）はい
つれも十はう（十方）におはしますなり。中
にも、とうはうしやうるりせかい（東方浄瑠璃世界）のや（薬）
くし（師）によらい（如来）にしくはあらし。それはん（万）
ふつ（仏）は、ひかしよりはしまり、さて
ねはん（涅槃）の宮こにおさまるなれは、
人けんしゆつしやうのはしめなれは、
このしやうるりせかい（浄瑠璃世界）をしらては、な
にのえき（益）かあるへきとて、あけくれ
おこたる事なく、やくし（薬師）のみやうかう（名号）」（六紙）

（第七紙・詞3―2）

をのみとなへさせ給ふ。まことにあり
かたき事ともなり。ある日のつれ
〳〵に、ひめきみ（姫君）ゑん（縁）にいてたまひ、
やくし（薬師）の御名をとなへ、四方をくはん
しておはしけるところへ、いつくとも
しらす、まなつる（真鶴）つかひとひきたり。
まつ（松）のえた（枝）にす（巣）をくひて、うたひ

けるは、まつ（松）のえた（枝）には、ひなつる（雛鶴）の、
すたつをみれは、うこきなき、いはほの
かたにゐるかめ（亀）の、千世よろつ（万代）代もか
きりなく、いはふはきみかためなれや、
こゝろもきよきいけみつの、すめるはひ
ろきめくみかなと、うたひてはまひ、
あかりてはまひあそひたはふる、
ありさま、ひとへに
めてたき事とも
なり。」（七紙）

（第八紙・絵3）

錯簡。本来この絵は、『松竹物語』の第一七紙（絵5）に入るべきもの。

懿徳天皇の御代、日向国岩根山の麓に住む老夫婦は、神代よりやせ衰えることなく齢を保っていた。その噂を聞いた天皇が夫婦の暮らす庵へと行幸する場面。

（第九紙・詞4―1）

錯簡。第九紙（詞4―1）、第一〇紙（詞4―2）、第一一紙の絵（絵4）は本来、現在の第五紙の絵（絵2）の後に入る。

かくてひめ（姫君）きみは、あるゆふ（夕暮）くれのこ
となるに、さやかなる月のさしいて
給ふやまの（山）はを（端）なかめやり、わかねかふ
しやう（浄土）とはそなたそとおほしめし、こゝろ
をすましおはしましけれは、こくう（虚空）に
をんかく（音楽）きこえ、いきやう（異香）花ふりく
たり、しうんた（紫雲）な・くを（ひ）、ひめ（姫君）きみあや
しみ御らんすれは、雲のうちよりひん（鬢）
つらゆひたるとうし（童子）、一人こつせんと
ひめ（姫君）きみの御まへに・いり（ま）、の給ふや
う、われはこれ、やくし（薬師）の十二しんしやう（神将）
の中、こんひら（金比羅）大しやう（大将）なりとて、る
りの（瑠璃）つほ（壺）をとり出し、ひめ（姫君）きみに
あたへ、きみあまりにやくし（薬師）のみや（名号）
うかうたつとくとなへ給ふ御こゝろさ
し、しやう（浄土）とにつうし、それかしを
御つかひに下されしなり。又このつ（壺）
ほの中に、らうやく（良薬）あり。これを御
なめたまはゝ、御いのちもつきすいつ

もわかやかなる御すかたにて、かなし
きも又うれへ給ふ事もあらしと」（九紙）

（第一〇紙・詞4―2）
いひすてゝ又こくう（虚空）に
あからせ給ひ
けるこそ
ふしき
なれ。」（一〇紙）

（第一一紙・絵4）
薬師如来を信仰する姫君の前に忽然と童子が現れ、自分は薬師如来の十二神将の金比羅大将であると名乗り、姫君に瑠璃の壺を渡す。この壺の中には薬が入っていて、それを舐めると不老長寿となることが語られる場面。

（第一二紙・詞5―1）
さゝれいしの宮、このつほ（壺）をうけと
り給ひ、あらありかたや、このとし月
ねかひたてまつるかひ（甲斐）ありて、かくの
ことくのきすい（奇瑞）あるこそ有かたけれ
とて、三度らいし（礼）給ひつゝ、らうやく（良薬）
をなめたまへは、まことにあまき事
かんろ（甘露）のことし。そのうへ又つほ（壺）を
よく〳〵御らんすれは、るりのうへ（瑠璃）に
しろきもんし（文字）すはれり。よみて御
らんすれは、うた（歌）なり。
君か代は千世にや千よ（八千代）にさゝれ石の
いはほ（巌）となりてこけ（苔）のむすまて
となむありけり。これすなはち、とう（東方）
はうしやうるりせかい（浄瑠璃世界）のあるし、やくし（薬師）
によらい（如来）の御詠哥なり。それより
もやかて御名をひきかへさせた
まひ、いはほのみや（宮）とそ申ける。そ
のゝちとし月をゝくり給ひけれ
とも、いさゝか物うき事すこしもな
く、御としかさなれとも、よはひ（齢）おと
ろふる御事もましまさねは、たゝいつも」（一二紙）

（第一三紙・詞5―2）
かはらぬ御すかた（姿）にてわたらせ給へは、
みたてまつる人〳〵ふしき（不思議）のおもひ

をなしにけり。かくてひめきみ（姫君）も
わか御こゝろなからも、かゝるふしぎ（不思議）なる
事あらしとおほしめし、いよ〳〵
たつとくおほしめして、やくし（薬師）の御
名をのみとなへさせ給ひけり。御
宮つかへの人〳〵も、かくめてたき姫
きみ（君）につかへたてまつる事こそ、ひ
とへにたしやう（他生）のきえん（奇縁）なれとて、
をの〳〵心をつくして、みやつかへをそ
いとなみける。ひめきみ（姫君）おほせける
やうは、いかにめん〳〵きゝたまへ。われ
かくめてたきよはひ（齢）をのふる事も
ひとへにとうはうしやうるりせかい（東方浄瑠璃世界）
のけうしゆ（教主）、やくし（薬師如来）によらいの御はから
ひなり。かた〳〵もたつとみたまへ
とおほせけれは、御まへの人〳〵も
けにかたしけなくおもひたてまつり
けふ（今日）よりはいかにもしてやくし（薬師）のみや（名号）
うかうをとなへたてまつらんとて、を
の〳〵ひめきみ（姫君）の御けうけ（教化）をそ、たゝ」（一三紙）

（第一四紙・詞5―3）
きゝ給はゝ、あら〳〵やくし（薬師）のゐとく（威徳）を
かたりてきかせんとありけれは、御まへ
の人〳〵、これはありかたき次第と
て、みゝをすまし、くひすをつゐてそ
きゝたまひける。ひめきみ（姫君）おほせ
けるやうは、それやくし（薬師）と申たてまつ
るは、このせかい（世界）のけうしゆ（教主）として、と（東方）
うはうしやうるりせかい（浄瑠璃世界）をつかさとり
給ふ。されは、るりの二（瑠璃）し（字）は、たま（玉）に
とゝまる、玉にはなるゝとかけり。そ
のこゝろは、たま（玉）といふは、いのち（命）なり。
そのゆへに、玉をせかい（世界）のたから（宝）と
せり。このたから（宝）のいのち（命）をこくう（虚空）よ
り人けん（如来）にあたへ給ふを、やくし（薬師）に
よらいうけとり給ふところを、るとい
ひて、たま（玉）にはなるゝなり。それに
よつてとうはう（東方）は、せかい（世界）のはしめとし
て、はんほく（万木）も春はさかゆるなり。秋
は又ちりて、ふゆ（冬）はおさまるなり。
このおさまるところをねはん（涅槃）の宮

こと申なり。やくし（薬師）よりそなへ給ふた（宝）
からのいのち（命）を、又もとのやくし（薬師）へかへし」（一四紙）

（第一五紙・詞5―4）
申をきみやう（帰命）といひて、いのちをかへ
すと申なりとのたまへは、御まへの人
〳〵、これをきゝ、まことにけうしゆ（教主）
しやくそんのをしへをきくこゝちし
て、をの〳〵かんるい（感涙）をなかし、手
をあはせ、たつとみける。さるほとに、
ひめきみ、いよ〳〵たつとくおほし
めし、をこたらすみやうかう（名号）をとなへ
給ふ。ある夜、よもすからともし火を
かゝけ、たゝひとりやくし（薬師）のしんもん
をかんしておはしけるか、けしからすいき（異香）
やうくん（薫）して、花ふりくたる。ひめきみ（姫君）
いかなることやらんと、こゝろをすまし
おはしけれは、かたしけなくもやくし（薬師）
によらい（如来）はしけん（示現）したまひて、たつと
き御こゑを出し、岩ほの宮にむか
ひ、のたまふやう、いかになんち（汝）、われ
ねんする事、しゆせう（衆生）なり。さるに
よりてふらうふし（不老不死）のくすり（薬）をあたへ
しなり。いつまてもこの世になからへ
て、わかほう（法）をひろめ、むえんのしゆ（衆）
しやう（生）にをしへ給へや。われはとうほう（東方）」（一五紙）

（第一六紙・詞5―5）
しやうるりせかい（浄瑠璃世界）のあるし（主）なりとて、
ひたりの（左）御手にこんていの（金泥）ほけきやう（法華経）
やうをとり出し、いはほのみや（宮）にたて
まつり、いよ〳〵をこたらすわれをねん
せよ。すこしもものうきことあらしとの
給ひけれは、ひめきみ（姫君）御きやう（経）をう
けとり給ひ、あらありかたの御事や、
おなしくはにによらい（如来）のすませ給ふしや（浄土）
うとを一めおかみたてまつらはやとの
給へは、御そう（僧）きこしめし、やすきこと、
さらはとうはうしやうるりせかい（東方浄瑠璃世界）の有
さまを、たゝ今こゝにうつしてみせ申
さんとて、ひかし（東）にむかはせたまひ
て、しゆ（誦）をとなへ給へは、にはかにはな（花）

ふり、おんかく（音楽）きこえ、しうんみち（紫雲）〳〵て、
天人はけいしやうう（霓裳羽衣）ゐのきよく（曲）を
なし、ほさつ（菩薩）しやうし（聖衆）ゆはめん〳〵に
くはんけんのやくをつとめ思ひ〳〵
のすかた（姿）にて、ひめきみ（姫君）をはいし（拝）給へは、
ひめきみ（姫君）御らんして、あら有かたの御
事や。かゝるきとく（奇特）にあふ事も、ひ
とへにやくし（薬師）の御めくみそと、かんるい（感涙）」（一六紙）

（第一七紙・詞5―6）
をなかし、たつとみ給ふ。御そう（僧）おほせ
けるやうは、いつまてかくてあるへき
そや。今ははや、御いとま申さんと有
けれは、ひめきみ（姫君）、いましはしとて、御
ころもの（衣）袖をひかへたまへは、いつまて
かくてもつきせし。又こそとの給ひ
て、こくう（虚空）をさしてあからせ
たまふ。」（一七紙）

（第一八紙・絵5）
錯簡。この絵は、『松竹物語』の第三紙（絵1）に入るべきもの。懿徳天皇のもとに諸国から続々と献上品が届く場面。
本来、ここには、第二一紙の絵（絵7）が入る。

（第一九紙・絵6）
錯簡。本来は、第三紙に入るべき絵か。要検討。

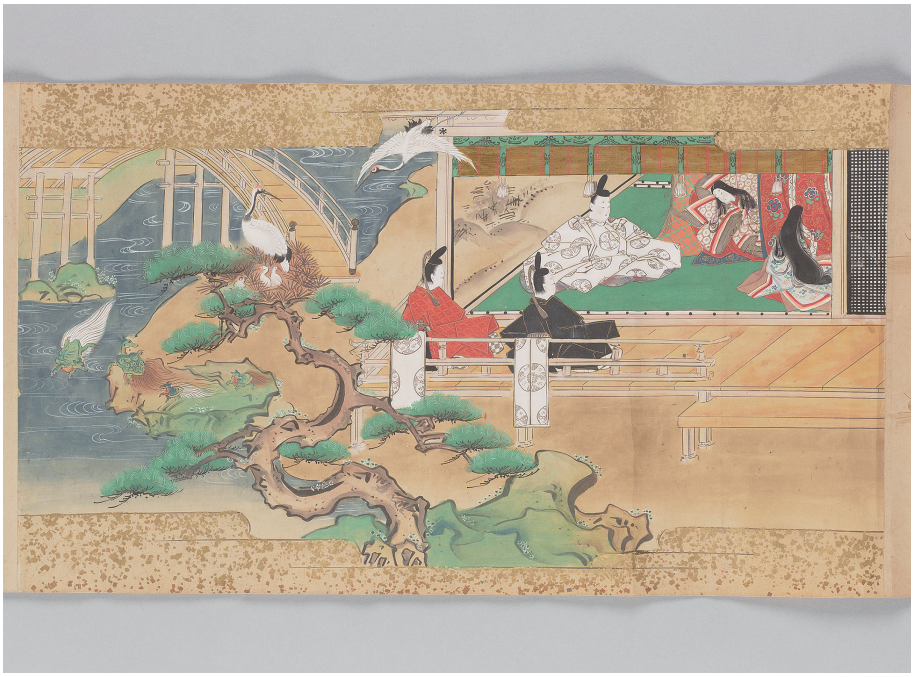
（第二〇紙・詞6―1）
ひめきみ（姫君）たつとくおほしめし、それ
よりいよ〳〵しん〳〵きもにめいして
そおほえける。かくて、このよしち（父）、み（帝）
かときこしめし、さてもふしきの
次第かなとて、それよりもひめ君
の御すゝめに入せ給ひて、おなしく
しん〳〵をおこし給ひて、やくし（薬師）の
みやうかう（名号）をとなへさせ給ひけれは、
まことにをしへのことく御いのちも
なかく、つゐに物うきこともなく、一
てん（天）四かい（海）もおたやかにおさまり
けり。せいむ（成務）天わう（皇）はいつまても有へ
けれとも、世のそしりもいかゝとて、御代

をわうし（皇子）にゆつり給ひて、ちうあい（仲哀）
天わうと（皇）かうし（号）、御身はゐん（院）にならせ
給ひて、あけくれやくし（薬師）のみやう（名）
かうを（号）となへ給ひければ、御いのちもな
かく、御かたちもかはらす、めてたくこそさ
かへ給ひけれ。まことにたつとむへ
き事ともありかたし〳〵。」（一八紙）

（第二一紙・絵7）
錯簡。薬師如来への信仰を一層深め、仕える人々にも薬師の教えを広める姫宮の前に薬師如来をはじめ、天人らが天下り、華やかな浄瑠璃世界を再現する場面。

【付記】
本稿は、はじめにも記したように、二〇二二年度、近畿大学文芸学部において実施した「書誌学2」の授業成果をもとに論文化したものである。近畿大学中央図書館に所蔵される二種の奈良絵本絵巻に見られる錯簡の復元を、本授業の担当者である高木浩明の指導のもと、本授業を受講した学部生が、原本の調査、関係論文の収集と分析、積極的な意見交換、レポートの作成を経て試案として提出するものである。論文の執筆は、高木が行い、その責任も全て高木にあるが、成果そのものは、受講生の積極的な参加と意見交換があって可能になったものであることから、以下の受講生を共著者に加え、敬意を表するとともに、学会に向けてその成果を発表することとした。（五十音順、所属は当時）

大角ひかる　文学科日本文学専攻創作・評論コース
角地夏葉　文学科日本文学専攻言語・文学コース
木下桜典　文学科日本文学専攻言語・文学コース
阪口俊弥　文学科日本文学専攻創作・評論コース
成尾信明　文学科日本文学専攻言語・文学コース
藤本将太　文学科日本文学専攻言語・文学コース
松尾遼　文化・歴史学科



絵(1)『さざれ石』００４

絵(2)『さざれ石』００７

絵(3)『さざれ石』０１１・０１２
（『松竹物語』の第 17 紙に入るべき絵）

絵(4)『さざれ石』014・015・016

絵(5)『さざれ石』０２３・０２４
（『松竹物語』の第３紙に入るべき絵）

絵(6)『さざれ石』０２５・０２６

『松竹物語』００３・００４・００５

絵(7)『さざれ石』027・028